

# 2024年度事業報告（案）

（2024年1月1日～12月31日）

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

## 1. 事業成果

2024年を振り返るとき、学校現場で声高に叫ばれていたのは「教員の働き方改革」である。これは、学校教員のなり手がいない、先生方がバタバタと現場で倒れてしまうなどの深刻な状況から、やっと立ち上がった課題であり、大いに進めるべきと考える一方で、「働き方」の改革だけで、本当に子どもたちが抱えている様々な問題が解決していくのだろうかという疑問を持たざるを得なかった。

こうした状況の中でも、Ed.ベンチャーでは困り感のある弱い立場の子どもたちへの取り組みや、学校教育を支えていく視点を持った研究活動などを2024年も継続的に展開した。それぞれの活動単位が自主的に活動を進める一方、全体の共通のテーマとして、平和についても取り組むことができた。自主的な活動と共通テーマの活動というスタイルはここ2年間のものであるが、効果的であり、これからも定着を目指したい。

各活動については一定程度の成果を上げたものにとらえている。この背景には、報告会の定期的な開催をやり続けるなかで、それぞれの活動を随時報告し合ってきたという、当団体の平時からの取り組みがあることは見逃せない。各事業の質の継続はやはり重要であり、それを担保する方法論としての報告会をこれからも機能させていくべきであるとする。

しかしその一方では、参加者の確保が大きな課題となった事業があったことも否定できない。参加者が低迷する理由としては、事業内容、周知方法、開催日時などに原因が考えられるが、大きくは周知の方法によるものではないかと思われる。時間的なゆとりをもって、多くの人に広報することが周知の基本だが、この基本をもとに、これからも周知や広報の工夫を重ねていくことが求められている。

しかしその一方、Ed.ベンチャーの活動のような民間の地道な活動に積極的に参加を希望する先生方も減少してきているという現実も確かである。それは先生方だけでなく、日本社会全体で、「よりよい変化」を求める行動や活動への参加が減っていることのあるわけとも思われる。その裏にはあきらめに似た「どうせやっただけ」という無力感があるのかもしれない。この無力感は、自分のことだけで精一杯で、他者のことまで考えられないという追い詰められた感情を生み出しやすい。

Ed.ベンチャーが向かうべきは、こうした無力感を克服し、少しでも人と人が手をつなぐ場の創出である。そのために一番必要なことは、活動の継続であるとする。とはいえ、2024年も、Ed.ベンチャーとして、それなりの質の活動を継続できたと総括したい。

## 2. 事業内容

### 学校支援事業 ①理論学習会

<p>【2024年事業目標】教育現場の状況を討論の中で分析し、客観視することで、今後の学校や教員のあるべき方向性を模索する。</p>	
<p>【事業総括】</p> <p>2024年度は、昨年度から引き続き「捨てられない学校に変わっていくために」をテーマに、参加者との議論を通して、学校が置かれている状況や学校が抱える課題を整理した。子どもや保護者から期待されなくなった学校を改善するためには、子どもを取りまく課題を捉え、教師自身が試行錯誤しながら、自ら変化し続けていくことが必要である。特に2024年度は「学校だからこそできることは何か」に重点を置き、対話を重ねた。</p> <p>前半の学習会では、「戦後の学力観」を問い直すことから始めた。社会は大きく変化しているにもかかわらず、いまだに「みんなと同じ」という価値観やテストで序列化するような学習評価が残っており、社会が求める人材育成のための窮屈な学校のシステムが子どもたちにとって学校が必要とされていない要因の一つではないかと議論された。また、学校で教えることが遠ざかってしまっている「平和」をなぜ学ぶことができないのか、なぜ教師は遠ざけてしまっているのか、今の子どもたちに伝えていくべき学びに制限がかかっているという現状の難しさについても話された。</p> <p>そのような議論をもとに、後半ではフリースクールや学びの多様化学校などを参考に、新しい学びの取り組みから学校が変わる可能性を模索した。「なぜ学校に行くことができなかつた子どもたちが足を運んでいるのか」を探る中で、異学年での学び、探究的な学び、民主的な学びなど、子どもがもつ個性や考えを尊重した学び合いが展開されていることを確認することができた。</p> <p>また現状の公立小中学校で、子どもたちが求める学びは何か、子どもたちに伝えていくべき学びを教師としてどのように展開するべきかを検討した。子どもたちの身の回りのこと、生きていく上で必要な知識を組み込みつつ、子どもたちの実態に合わせ、生活科・総合的な学習の時間を活用していくことができるのではないかと意見が挙がった。今、学校は「期待されない」危機的な状況であると言える。子どもたちの声を聴き、子どもたちが求める学校とは何か、子どもたちに今必要なことは何かを問い直し、新たな学校教育を創り出すことが求められる。参加者とともに対話することで、これからの学校や教師が新しい学びを展開していく覚悟をもつことが必要であると再確認することができた。</p>	
担当者	●活動代表（理事）清水美希 柴田滯 村本綾
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 4月27日（土）13:30～15:30 『学校だからこそできること』を探して 大和市シリウス612及びオンライン（Zoom） 参加者8名</p> <p>② 6月15日（土）13:30～15:30 『戦後の学力観における学校現場の限界』</p>

	<p>大和市シリウス 603 及びオンライン (Zoom) 参加者 10 名</p> <p>③ 8月24日(土) 13:30~15:30 「子どもが戦争と平和への理解を深めるためには」</p> <p>大和市シリウス 606 及びオンライン (Zoom) 参加者 10 名</p> <p>④ 10月26日(土) 13:30~15:30 「人との関わりの中で学び合う学校から学ぶ①」</p> <p>大和市シリウス 606 及びオンライン (Zoom) 参加者 9 名</p> <p>⑤ 12月14日(土) 13:30~15:30 「人との関わりの中で学び合う学校から学ぶ②」</p> <p>大和市シリウス 604 及びオンライン (Zoom) 参加者 8 名</p> <p style="text-align: right;">(のべ参加者数 45 名)</p>
収入金額	22,000 円 (受取負担金 22,000 円)
支出金額	4,850 円 (賃借料 4,850 円)

## 学校支援事業 ②授業研究会

**【2024 年事業目標】** どのような子どもたちも排除されずに学べる教室空間の形成を目指して、実際の教室空間で起きている事柄を語ることを通して、阻害要因のあぶり出し、そうした要因との対峙の方法を検討していく。

### 【事業総括】

2024 年度より「教室空間を問い直す」ことを柱にリニューアルした授業研究会を行った。具体的には、20 代の教員を中心に、学校現場での葛藤を語ってもらいながら、どのような子どもたちも排除されずに学べる空間の構築に向けての実践の方向を検討した。具体的には、次のような課題が取り上げられた。

- ①特別支援教育に関わる制度設計は自治体によって相当程度に違っていることが共有できた。ただし、その違いを検討すると、制度そのものが排除を生みやすいものになっている場合もあり、制度設計にも十分に注意が必要であることを検討できた。
- ②低学年を中心に、学校生活に慣れさせることを目的に「訓練」的な実践が多く行われており、それに不応を示す子ども達が、不登校傾向になっている経路があることが確認できた。「訓練」の要不要を教師が判断し、できるだけ少なくする方向に導くことで、自分の考えで行動できる子どもがたち増えていく可能性があることを検討できた。
- ③地方と都市では、「教室空間」といっても、前提となるものがかなり違うことが共有できた。地方の小規模小学校の様子として、教員として働いても「先生」感はあまりなく、教室の中にも競争的な雰囲気はあまり生じない。他方、人数が少ないために、子どもが面倒を見られすぎていて、自分で工夫するといった指向に向きにくいなど、地域と学校について比較して検討できた。
- ④学校内で「母子分離不安」という症状への言及が頻発している状況が確認された。母子

の関係に限定して問題をみるまなごしは、子育てを母親の責任とする風潮に棹さすため、そうした風潮に抗う対応が必要であることが確認できた。	
担当者	●活動代表（理事）清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	2月10日（土）17:30～19:30（ハイブリッド） 参加者6名 4月27日（土）16:30～18:30 大和市シリウス603 参加者11名 6月15日（土）16:00～18:00 大和市シリウス603 参加者10名 8月24日（土）16:00～18:00 大和市シリウス606 参加者13名 10月26日（土）16:00～18:00 大和市シリウス606 参加者13名 12月14日（土）16:00～18:00 大和市シリウス604及び オンライン（Zoom） 参加者10名  (のべ参加者数63名)
収入金額	8,000円（受取負担金8,000円）
支出金額	2,900円（賃借料2,900円）

### 学校支援事業 ③スタディツアー（2024年度活動休止）

【2024年事業目標】 2024年度は活動休止	
【事業総括】 2023年度、2024年度は新型コロナウイルスの感染拡大などにより、現地訪問を休止してきたが、2025年度より活動再開する。活動再開に向けて、子どもたちや家族を巡る状況に注視しながら、訪問場所の検討を進めた。	
担当者	●活動代表（理事）池田喬
内容・日時・場所・参加者数	
収入金額	0円
支出金額	0円

## 学校支援事業 ④外国人の子ども理解のための学習会

【2024年事業目標】外国人の子どもの現状や課題を理解する場、外国人の子どもに関する専門的な知識を学ぶ場を企画運営する。

### 【事業総括】

#### ① 学習会

4月は「外国ルーツの子どもたちの来日経緯を知る～自分史づくりがもたらす可能性～」をテーマに清水睦美氏にお話しいただいた。外国にルーツのある子どもたちにとって、自らのルーツを知ることは、自己形成の上で重要だと言われる。かれらのルーツをたどると、戦争や内戦、政治的抑圧等、世界情勢や日本国内の動向と結びつくことがほとんどである。しかし、学校において、このことが外国にルーツのある子どもたちに語られる場面はほとんどなく、意図的に取り込まれなければ、子どもたちは自らのルーツを知らずに一生を終えていくことになる。今回は支援者が、外国にルーツのある子どもたちの来日経緯を知ることで、かれらの自己形成、自分史づくりにどうかかわっていただけるかを考えていった。

その中でも自分史作りの現場に誰がいるかによって、そこにできあがる物語が変わる。「子どもの個人的な語り」を「聞き手の知識に基づいて社会的に位置づける」ことが自分史作りの地盤となっていく。その語りを個人の責任に落とし込むのではなく、社会の作りや仕組みに原因があるという考え方に意味づけていく、すなわち、マジョリティとマイノリティの間の不均衡が障害を生み出していると考え、社会が障害を作り出しているからそれを解消するのは社会の責務と捉えることが重要であると学んだ。

個人的な語りができるように促す中でも、いじめや差別などの無意識的に語るのを避けたがる場面もあり、その事実とどう向き合い、ルーツのある子どもとどう意味づけられるかが試されていると感じ、とても考えさせられた。

8月には「外国人の子どもの対話による自己形成」をテーマに小学校教諭の小林加奈氏と中学校教諭の藤木仁美氏にお話しいただいた。

2023年度は国際教室や家庭での対話が言語形成や人格形成だけでなく、記憶の結びつきに大きく関わっていることを学習した。今年度は国際教室を担当した経験者に当時の実践経験を振り返ってもらいながら、改めて国際教室での対話が自己形成にどうつながっていくのかを講演してもらった。

小林氏からは、小学生の事例が挙げられた。日本語とスペイン語のダブル言語であるI君の事例ではクラスの3/4からI君の苦情を受ける日々はあるが、本人に話を聞くと問題行動の前にはI君自身が100%嫌な経験をしていたことが分かった。最初は「どうせ話したってわかんないでしょ」とネガティブだったI君が身近な大人である先生と対話を続ける中で、突拍子もない夢や思い付きの話聞いてくれる他者のおかげで、夢に向けた計画を自分で軌道修正できるようになっていき、ポジティブな会話になっていった。

対話によって経験が整理され、その経験が価値づけられていく。言葉を獲得していくことによって、より深く考えることができるようになる。安心できる対話相手がいることで、自分の気持ちを言葉にすることで整理ができ、自分の気持ちを分析できるようになる。

る。よりよいものを目指す土台ができていくことで自己形成の確立へ向かっていくのではないかとまとめた。

藤木氏からは、中学生の事例が挙げられた。座間市では国際教室の実践前例や市からのサポートが乏しく、振り返ると藤木氏本人も担当者として自身の在り方を模索していた。自分についてもっと知りたい中学生にとって、表面的な体裁だけでなく他愛のない会話から自分のことを語る必要があるとあり、その機会が中学校はとて少ないと振り返った。中国語を母語とする N さんは、クラスになじみたいが、場違いな発言からトラブルも多かった。もっと自分を見てほしい、友達が欲しいと国際教室ではひたすらおしゃべりをするこもしばしばあった。言いたいことがうまく伝わらない葛藤もありクラスで空回りすることも多かったが、N さんの面白さを認めてくれる人も出始め、居場所ができていった。小3でアメリカから日本へ来た J さんは、母は教育熱心だが、自分から交友関係を広げることが苦手な静かに過ごすことが多かった。中学3年の人権作文で「日本での暮らしにくさ」について語り、受賞したが、全校朝会での発表は拒んだ。堂々と発表してほしかったが安心できる環境ではなかったのだろうと当時を振り返った。

特に中学校ではクラスや家庭の中では目立たないように、怒られないようにと必死で身を潜めていることも多い。「ここは自分を出してもいいんだよ、リラックスしていいんだよ」と安心できる環境が必要だとまとめた。

## ② 事例研究会

小中学校の先生方と研究会スタッフが提供した事例について協議をした。事例は、家庭内が複数言語環境にある子どもの困難さ、問題行動が心配される子ども、適応に困難を抱える子どもの事例などであった。さらに、これまで国際教室担当の先生方から事例が提供されてきていたが、今年度は中学校の先生から、教科担当者が授業の中でできることは何かという事例が提供されたことは新たな点であった。協議の中では、みんな同じじゃなくていい、違いを面白がるようなおおらかな雰囲気が先生や教室にあること、子どもに価値観の多様性を伝えていくこと、問題を本人の問題に閉じ込めるのではなく社会に結びつけるように支援者が意識を持つことといったことが共有された。そして、常に問い続けることで子どもの主体性を育てていくことにつながるという、教師の支援姿勢について学ぶ機会ともなった。常に問い続けることは、子どもとの「対話」を生むことであり、昨年度の学習会のテーマに通じる内容であった。

研究会の1回は、大学院生の研究成果を発表してもらい、学習した。学校の国際教室と地域の学習支援教室の事例から、支援の方針が決定される過程の違いが明らかにされた。方針決定が、教室の持つ役割（在籍クラスの補完的役割）の有無や方針を立てる際の担当者間話し合いの場の設定の容易さの有無によることが指摘された。外国ルーツの子どもの困難さを多様な観点から見取ることが、支援に繋がることを理解することができた。

担当者

- 活動代表（理事）西岡歩
- スタッフ 篠原弘美

内容・日時・場所・参加者数	<p>① 学習会</p> <p>4月23日(火) 19:00~21:00 「外国ルーツの子どもたちの来日経緯を知る～自分史づくりがもたらす可能性～」 講師 清水睦美氏(日本女子大学教授) 大和市シリウス612及びオンライン(Zoom) 参加者 11名</p> <p>8月6日(火) 13:00~16:00 「外国人の子どもの対話による自己形成」 講師 小林加奈氏(大和市小学校教諭) 藤木仁美氏(座間市中学校教諭) 大和市シリウス612及びオンライン(Zoom) 参加者 17名</p> <p>② 事例研究会 オンライン(Zoom) 10月19日はシリウス612 水曜日開催 3/27 6/5 9/25 11/20 土曜日開催 5/18 7/13 10/19 のべ参加者 33名  (のべ参加者数 61名)</p>
収入金額	15,500円(受取負担金8,000円、受取寄付金7,500円)
支出金額	20,637円(賃借料5,500円、諸謝金11,137円 消耗品費4,000円)

## 学校支援事業 ⑤インクルーシブな社会を目指す学習会

**【2024年度事業目標】** 子どもの声を出発点にすることで、どのように教師・学校が変わることができるのか。実践を通して考え、インクルーシブな学校・社会の目指すべき方向を探る。

### 【事業総括】

今年度は、子どもの声を出発点として、インクルーシブな教育の実現を目指し、2つの柱を立て計6回の学習会を行った。

① 学校現場におけるインクルーシブの実際を知り、インクルーシブな学校の実現の具体的な方策について探る

6月の学習会では、講師の竹本弥生氏から県立高校におけるインクルーシブ教育推進の経緯、現状について聞くことができた。特別募集の志願資格要件の緩和、県外受験生の受け入れなど、制度として志望者を受け入れやすくなっていることを知ることができた。また、実際に綾瀬高校で行われている複数教科での学習支援、リソースルームの活用などについては、小・中学校で行われている支援策と重なる部分も多く、職員の増加により学

校が多様な子どもを受け入れられる場所になるという、希望を見ることができた。

しかし、募集要件に残る「知的障がい自認」、また「特別募集により入学した生徒が受ける特別なカリキュラム」などの課題も見えた。特別募集が、“知的障がい者が入学するための窓口”でしかなく、特別募集での入学がその後のカリキュラムを“知的障がい者が受けるためのカリキュラム”になっているとすると、フルインクルーシブには程遠い。インクルーシブな社会実現のため、少しずつ前進している面と現状の課題を知ることができた。

7月、10月、11月は、「意思疎通が難しい子どもへの支援」をテーマに事例研究を行った。

3回の学習会をとおして、「周りの支援者(子どもたち)の動き」「周りの子どもたちがその子に対してどのような感情を持っているのか」という、本人(個人)から集団に目を向ける視点を得ることができた。

本人の意思表示が難しい中、「一般的には…」「こうあるべき」といった“当たり前”の押し売りをどう脱却するのか。教師自身が、子どもの変化・成長をおおらかに受け止める覚悟を持って保護者・子どもと関わる必要性を改めて感じた。

学校では、「全体をどうまとめるか」「静かに落ち着いていることがよいこと」といった視点できまりをつくり、すべての子ども・家庭にそれを求めている現状がある。支援が必要な子どもにどうアプローチをかけるのかを考えることは、うまくいかない原因をその個人に求めることにしかない。結果、集団の変化に目を向け、集団にいる個々の気持ちを聴き取ることを難しくしていると、今回の学習会で学ぶことができた。

## ②子どもの声を聴き取る「子どもアドボカシー」について学ぶ

5月、NPO法人 子どもアドボカシーをすすめる会 TOKYO の相澤京美氏を講師に招き、「子どもアドボカシー」についての学習会を行った。

子どものありのままの声・意志を聴き取る“子どもアドボカシー”という活動、アドボカシーの5つの分類、解決を目指すことではなく意見を表明する権利を守るという視点について知ることができた。

相澤氏からは「まずは子どもたちに意見を表明する権利があることを知ってほしい」「意思表明の権利は当たり前にある権利であると大人が自覚することが重要」という話があり、子どもとの向き合い方を見直すきっかけとなる学習会になった。

12月の学習会では、5月の学習会で学んだアドボカシーについての実践報告を行った。中学校からは、中学2年の道徳の授業で「子どもの権利条約」を題材とした実践が報告された。人権という言葉自体が子どもにとってなじみの薄いものであることもあり、「虐待」や「戦争」といった状況に置かれた子どもを守るための限定的なものとして理解されている様子が見られた。

ただ、「子どもの権利条約」の条文を見る中で、家族との関係や日々の生活の中で疑問に思っていることを話題に挙げる生徒もおり、「人権」という言葉を身近なものとして捉え直す様子も見られた。一度きりの授業であったため、生徒はアドボカシーにおいて重要な「意思表明権」、そして「子ども自身に権利がある」ということを知るだけで終わってしまった。3年では公民の授業も始まるため、今回1回の授業で終わることなく、次の授業

につなげていきたい。

児童養護施設の実践では、県のアドボカシー事業者が来園したときの子どもたちの様子、そして、職員として子どもの意思表示に寄り添う子どもとの関わり合いについての報告がなされた。

アドボカシーとはあくまで意思表示の手助けが目的であり、原因解決を目指すものではない。子どもの「こうしたい」という気持ちに、施設職員としてできることとできないことがある中で、どう対峙すればよいのか悩んだとのことであった。

講師の相澤氏からはそれぞれの実践について、授業でできることで完結を目指すのではなく、日常生活で「これがあなたの権利だよ」と伝えながら、人権の感覚を浸透させていくことが大切。養護施設では、「助けて」と言える関係性づくりが何より大切というアドバイスを受けた。

2回の学習会から、フォーマルアドボカシーの立場での実践には限界があるものの、「いつでも話を聞かよ」の姿勢を伝えること。そして、子どもと接するすべての大人が、子どもの権利を尊重していくことが求められていると感じた。

担当者	●活動代表（理事）森尾宙 山口貴子
内容・日時・場所・参加者数	<p>第1回 5月8日（水）19：30～21：00 大和市シリウス 602 「子どもアドボカシーを知っていますか～子どもの声を聴く意味 そして私たち一人ひとりができること～」 講師 相澤京美氏 (NPO 法人子どもアドボカシーを進める会 TOKYO) 参加者 8名</p> <p>第2回 6月4日（火）19：30～21：00 大和市シリウス 607 「インクルーシブ教育実践推進校から見る インクルーシブ教育のこれから」 講師 竹本弥生氏（県立綾瀬高等学校元校長） 参加者 7名</p> <p>第3回 7月4日（火） 19：30～21：00 大和市シリウス 612 第4回 10月10日（木） 19：30～21：00 大和市シリウス 603 第5回 11月28日（木） 19：30～21：00 大和市シリウス 612 事例研究会：中学校におけるインクルーシブの実践 「意思疎通が難しい子どもへの支援」 事例提供 座間市中学校教諭 参加者 第3回 4名、第4回 5名、第5回 2名</p> <p>第6回 12月6日（金）19：30～21：00 大和市シリウス 612 実践報告：『子どもアドボカシー』学習会を経ての実践」</p>

	報告者 森尾宙（座間市中学校教諭） 山口貴子（児童養護施設職員） 参加者 4名  (のべ参加者数30名)
収入金額	9,000円（受取負担金9,000円）
支出金額	27,494円（賃借料4,450円、諸謝金22,274円、雑費770円）

## 外国人支援事業

### ⑥ 子どもの居場所・学習支援教室(エステレージャ☆ハッピー教室)

【2024年度事業目標】外国にルーツのある子どもの居場所作りと学習支援を行う。さらに家庭や学校の様子を聞いて可能な範囲で支援を行い問題の解決を図る。

#### 【事業総括】

2024年度は昨年度に比べ教室に登録している子どもの数が多少増加した。日本語ができない子どもや、母国の中学校を卒業したものの高校途中で来日したために日本の学校に在籍していない子どもを受け入れたりして、多様な支援を展開することになった。また中学生になり、部活に参加しているため定期的に参加できない子どもでも試験前や部活が休みの時などに来る子どもがいて、エステレージャが彼らの居場所の一部になっているのだと実感することがあった。

#### ① 学習支援

主に個別に対応し、それぞれの状況に応じた学習支援を行った。特に今年度は来日間もない子どもが複数人いて、日本語の指導も必要になった。そんな折、他の子どもが日本語の指導の手伝いをしてくれたり、教科の学習においても同様に日本語以外の共通言語で教えあう様子が見られたりして、特に集団学習はできなくても子どもたちの関わり合いはできていたのではないかと考えられる。

また、スタッフが指導するのではなく、子どもがその子の得意なこと（手芸など）を教えるという機会を設け、その子の自己肯定感を高めると同時に子どもたちの関わり合いを深めることを目指す活動を行った。

高校受験に向けては、先輩の受験の経験を聞く機会を設けた。この機会は子どもたちには高校受験の理解を深めるのに役立ったのみならず、発表者にとっても自分の経験を振り返り、自分の言葉で語ることで有意義な経験したようだった。実際の受験指導では、冬休みにベテルギウスと厚木での勉強会をはじめ、学校説明会の帯同や書類の作成の手伝いなどを行った。さらに母国で中学校を卒業して来日した子どもを受け入れ、高校進学のための支援を行った。

#### ② 語り合いの場づくり

特に自らのルーツを調べて発表するようなことはできなかったが、日々の学習時や遊びの中で子どもたちが、家庭や学校のことを自然に話すことで、経験の共有化がで

<p>きたり、スタッフも子どもを取り巻く環境を伺い知ることができたりした。</p> <p>③ 母語教室 中学生になり部活動でエステレージャに参加できる機会が少なくなり、開催が困難になり今年度は開催できなかった。</p> <p>④ 保護者面談 定期的な面談の機会は設けてはいるものの、保護者の出席率が低かった。しかし面談時間以外にも必要に応じて保護者と話す機会を設けて対応していた。</p> <p>⑤ 教室運営 ・登録制（登録料として1か月100円を徴収） ・3学期制（1学期4～8月、2学期9～12月、3学期1～3月） ・年度当初にチラシは作成したものの、子どもたちの数がある程度充足したので配布には至らなかった。</p> <p>⑥ スタッフの育成 ・教室開催後のミーティングを毎回行い、子どもたちの様子や問題点と、今後の予定などを話し合った。 ・スタッフの母語教室は、対象となるスタッフが就職活動で時間が取れず開催できなかった。</p>	
担当者	<p>●活動代表（理事）福島聖子</p> <p>○スタッフ 角替弘規 篠原弘美 保坂克洋 根岸佐織 横矢玄 高島ヒトミ 滝川舞 ジェマイマ・ルース・アゴコプラ 佐藤ひより 吉川智洋 奥山奈希沙 津波りえ 井上哲夫 河村優花 ビジュアル・アイコ 藤原ケイト 相模女子大学ボランティアサークル「ミント」</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 毎週土曜日 10:30～12:30</p> <p>1/13 20 27    2/3 10 17 24    3/2 9 16 23 30 4/6 13 20 27    5/11 18 25    6/8 15 22 29    7/6 13 20 27 8/3 17 24 31    9/14 21 28    10/5 12 19 26 11/2 9 16 23 30    12/7 14 21</p> <p>大和市立林間小学校多目的室・図工室・家庭科室 大和市ベテルギウス 2F 会議室 大和市シリウス 603 大和市ポラリス room3 room7 room8</p> <p>受験対策学習会 11/18 25 12/2 16, 10:00～12:00 あつぎ市民交流プラザ 12/24 25 26 13:00～16:00、10:00～15:00 部室</p> <p>② ①に同じ ③ 開催実績なし ④ 4月・8月・12月</p>

	⑤ 毎週土曜日教室開催後 (のべ参加者数 306名)
収入金額	254,100円(受取負担金4,100円、受取助成金250,000円)
支出金額	271,113円(給与手当140,640円、保険料5,075円、 賃借料82,300円、諸謝金3,341円、印刷製本費1,310円、 消耗品費37,587円、旅費交通費860円)

## 子ども支援事業 (該当事業なし)

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

### ⑦ 教育相談

【2024年事業目標】 相談事業を通して、ニーズの把握と必要な事業の展開の仕方を検討する。	
【事業総括】 学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体等の各種相談に応じることを目的としているが、2023年同様に新規相談はなかった。そのため、活動内容としては「すたんどばいみー基金」から引き継いだ相談業務を行った。多言語若手通訳の発掘と翻訳依頼については、新たに通訳1名を登録することができたが、通訳及び翻訳の依頼がなかった。	
担当者	●活動代表(理事) 松永雅文 林幹也 ○スタッフ 清水睦美 篠原弘美
内容・日時・場所・参加者数	① (2019年より継続)「すたんどばいみー基金」から移管された相談。該当者はS・E・R・Hの4名。それぞれ社会人として活動しているため、必要に応じた面談等を行った。 ② 多言語若手通訳派遣事業 A 通訳登録6名(ベトナム語1名、カンボジア語1名、タガログ語2名、スペイン語2名)なお、通訳翻訳依頼がほとんどないこともあり、通訳登録そのものが事業期間の最後になってしまった。登録方法の改善を検討する必要がある。 B 翻訳依頼0件 ③ 新規相談は依頼がなく対応しなかった。
収入金額	0円
支出金額	33,628円(諸謝金33,408円、通信運搬費220円)

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

## ⑧ 普及啓発活動

<p>【2024年事業目標】社会に対して当法人の理念と活動を紹介しながらその位置づけを明確にし、社会的に弱い立場にある人々に対する支援の重要性を普及・啓発する。これまでの活動テーマに加え、2024年度は「平和教育」に焦点を当てた情報発信に留意する。</p>	
<p>【事業総括】 当法人の理念と活動を紹介し、学校支援、外国人支援、子ども支援の必要性を広く市民に呼びかけ、社会的に弱い立場にある人たちへの支援の重要性に関する啓発を行うため、以下の活動を行った。</p> <p>① 広報誌「Ed.ベンだより」はNo.61～66の計6号を発行した。</p> <p>② ホームページは各事業内容の進行に合わせ、随時告知と報告を更新した。アクセス数は10792で、前年比3578増となった。</p> <p>③ 2024年度パンフレット（三つ折り版）を作成・配布した。</p> <p>④ 特定のテーマ（a.脱・反原発 b.女性 c.平和教育）に関する情報発信として、「a.脱・反原発」と「c.平和教育」に関しては、Ed.ベンだよりやHPの理事推薦本のコーナーにおいて随時取り上げたが、「b.女性」に関する内容については、積極的に取り上げるに至らなかった。</p> <p>⑤ 資料・書籍の管理販売として、部室にて書籍を販売中。</p> <p>⑥ 他機関・他団体との関係構築として、新たな関係構築は行われなかった。</p> <p>⑦ 渉外（研究者対応を含む）として、子どもの居場所・学習支援教室に対するインタビュー調査の依頼があり、対応した。また、すたんどばいみーに対する取材依頼もあったため、すたんどばいみーとの橋渡しを行った。</p> <p>会員に対する情報提供が滞ってしまい、十分な情報提供ができなかった。</p>	
担当者	<p>●活動代表（理事）角替弘規</p> <p>○スタッフ 池田喬 清水睦美</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 大和市を中心に教育関係・国際関係団体に配布 (約2000部/回)</p> <p>② 随時（担当者打合せを原則月1回開催）</p> <p>③ 2024年度パンフレット配布 4月配布（約2300部）</p> <p>④ 売上合計0円</p> <p>⑤ インタビュー調査対応1件、10月31日 すたんどばいみー紹介2件、8月5日・10月21日</p>
収入金額	50,000円（受取助成金50,000円）
支出金額	340,856円（印刷製本費88,301円、通信運搬費210,314円、消耗品費35,696円、業務委託費4,620円、雑費1,925円）

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

## ⑨ 教育講演会

<p>【2024年事業目標】現在の社会状況を踏まえて、教育講演会で扱うべきテーマを検討する。それを踏まえて、参加者に問題提起し、互いに議論する教育講演会を企画・運営する。</p>	
<p>【事業総括】</p> <p>2024年度教育講演会は、「平和教育」をテーマに、東京女子大学准教授、竹内久顕先生を講師にお迎えして開催した。講演では、「過去の戦争と今の現実の乖離」、「遠くの戦争と身近の現実の乖離」、「平和の理想と今日の現実の乖離」という3つの「乖離」をつなぐ「回路」をいかにつくるかという、日本の平和教育の課題が整理された。そして、「発達段階を踏まえた戦争の教え方」、「当たり前の『日常』＝『平和』の着目」「アートの活用や、非体験世代から非体験世代への伝承といった戦争体験の伝え方」、「シティズンシップ教育やコンクリフト（紛争、対立）解決教育の活動」など、これからの平和教育をどう創るかについての提案がされた。講演を受けてのパネルディスカッションでは、現場の先生方などがパネラーとして参加し、学校での平和教育の実践や、進める上での葛藤などについて意見が交わされた。</p> <p>8月からは、2025年度教育講演会に向けての検討会を開催した。未だ続く世界各地での紛争状況を踏まえ、引き続き「平和」をテーマとすることにした。講師は、カクワカ広島（※核政策を知りたい広島若者有権者の会）共同代表の田中美穂氏に決定した。</p> <p>12月には、講演会に向けての事前学習として、原発・核兵器を巡る世界情勢の整理についての学習会を開催した。</p>	
担当者	●活動代表（理事）池田喬
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 教育講演会 「未来への責任－平和教育を考える－」 講師 竹内久顕氏（東京女子大学） 2024年2月23日（金）13：30～17：30 会場 富士見文化会館1階101号室 参加者 16名</p> <p>② 2025年度教育講演会検討会 1. 2024年8月19日（月）19：30～21：00 2. 2024年9月9日（月）19：30～21：00 会場 大和市シリウス607 参加者 各6名</p> <p>③ 事前学習会 2024年12月7日（土）19：30～21：00 会場：大和市シリウス603 参加者 5名</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数33名）</p>

収入金額	41,300 円 (受取負担金 25,700 円、受取寄付金 15,600 円)
支出金額	113,286 円 (賃借料 40,680 円、諸謝金 33,411 円、 旅費交通費 1,460 円、印刷製本費 16,500 円、消耗品費 20,300 円、 雑費 935 円)

## ⑩ 法人の事業円滑実施のための活動

【事業総括】	
<p>① ・総会 2024 年 2 月 23 日 (金) 10:30~11:30 富士見文化会館 及び オンライン (Zoom)</p> <p>・活動報告会を年 13 回オンラインで開催し、審議・報告を行った。</p> <p>・事務局会議を年 6 回オンラインで開催し、事務局運営・事務所管理を行った。</p> <p>・年間計画を作成し、活動の全体予定を把握した。</p> <p>② ・会計については、月 1 回の会計処理を行った。</p> <p>・年 3 回の会計締切日を設定し、予算の執行状況を確認した。</p>	
担当者	<p>●活動代表 (理事) 篠原弘美 橘川眞知子</p> <p>○スタッフ 内藤順子 松永雅文 清水睦美 角替弘規 池田喬</p> <p>(会計) 篠原弘美 清水睦美 小西永里子</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① ・総会：2024 年 2 月 23 日 (金) 10:30~11:30 富士見文化会館 1 階 101 号室及びオンライン (Zoom) 参加者 61 名 (正会員 72 名)</p> <p>・活動報告会：13 回 (原則奇数月) オンライン (Zoom) 理事 15 名</p> <p>② ・会計処理：月 1 回 当法人事務所、部室</p> <p>・会計確認 (締め)：年 3 回 (1 月、8 月、11 月) 当法人事務所</p>
収入金額	708,823 円(受取会費 696,500 円、事業収益 12,000 円、 雑収益 323 円)
支出金額	297,105 円 (通信運搬費 106,580 円、消耗品費 4,200 円、 水道光熱費 42,585 円、租税公課 20,250 円、保険料 4,490 円、 諸会費 5,000 円、雑費 114,000 円)